

臨床研究内容 ホームページ公開用

1. 研究課題名称

大腿骨頸部骨折患者の急性期エネルギー摂取不足は回復期の機能回復まで遅延させるのか

2. 研究の背景・目的

大腿骨頸部骨折は高齢者に多い骨折の代表であり、リハビリテーションの中でも対象となる患者の多い疾患であります。大腿骨頸部骨折の死亡率に関する危険因子としては、年齢・認知症・性別（女性）・低体重（Low Body Mass Index）・低握力・歩行能力の低下・慢性疾患の有無などがあげられています。

低体重を防ぐためには栄養管理が大切であり、先行研究でも大腿骨頸部骨折患者術後1週間のエネルギー摂取量が推奨量（Harris-Benedictの式から基礎エネルギー量を算出し、ストレス係数1.1活動係数1.2をかけて必要エネルギー量とする）の70%未満であった症例は、急性期病院退院時のADL能力が低く、多変量解析の結果でも術前低栄養、握力、認知症、手術前の期間、エネルギー摂取不足がADL能力の改善に影響していたと報告しています。ただし、この研究では急性期の短期間の機能改善についてのみ言及しており、その後の症例がどのような経過をたどったのかは明らかになっていません。

そこで本研究の目的は、大腿骨頸部骨折患者の術後1週間のエネルギー摂取量不足は、回復期病院での機能回復にも影響を及ぼしていたのかを検討することとします。

3. 対象者および対象期間

2015年1月～2019年5月までに大腿骨頸部骨折で当院整形外科に入院し、北九州大腿骨頸部骨折連携パスを使用した189例。このうち回復期病院退院時までデータの不備のない95例を統計学的検討対象とします。

4. 研究内容

先行研究に基づき、エネルギー必要量を（Harris-Benedictの式から基礎エネルギー量を算出し、ストレス係数1.1活動係数1.2として、エネルギー摂取の充足度(1週間の平均摂取エネルギー量/必要エネルギー量)を3群(<70%, 70%<>100%, >100%)として急性期退院時のADL能力および回復期退院時のADL能力の比較を行います。また各在院日数と在宅復帰率も比較します。

多変量解析として、従属変数にADL改善率（回復期退院時のADL能力-急性期退院時ADL能力）として、独立変数は先行研究に基づき予後に影響を与え得る年齢・性別・急性期での体重変動・ALB・認知症・エネルギー摂取量の充足率・たんぱく質摂取量・手術前の待機日数として重回帰分析を行います。

5. 個人情報の管理について

データの集計の際は患者名をコード化し、個人を特定できないように配慮します。

6. 研究期間

2019.8～2020.8 までの 1 年間

7. 医学上の貢献

大腿骨頸部骨折患者の術後エネルギー不足が連携先でのリハビリテーションの効果に影響を及ぼしている場合、術後の栄養管理も今後積極的に行わなければならないことが示唆され、今後入院される患者の治療成績向上に役立つものと考えます。

8. 研究機関

製鉄記念八幡病院リハビリテーション部

9. 連絡先（研究責任者）

上記研究対象期間において該当になる方で研究に対して不都合がある場合や研究に対してご不明な点がございましたら下記の連絡先まで連絡をください。

製鉄記念八幡病院リハビリテーション部 鈴木裕也
805-8508 北九州市八幡東区春の町 1-1-1 TEL:093-671-9318